

## モーツァルト巡礼ーその12

K.518 水谷 康男

前回飛ばした K312～K329 から始めます。

K312 は、ソナタ楽章 ト短調 ですが、作曲年代が不明で、今ではごく晩年の作品とみなされて K590b ともいわれ、1790 年の夏、プロシヤ王ヴィルヘルム二世のためにウィーンで作曲されたものとみなされています。5 分程度の歌曲です。

K313 は、フルート協奏曲 第 1 番 ト長調 です。1778 年 1～2 月に、K285、285a、285b の 3 曲のフルート四重奏曲と同じく、マンハイムでお金持ちのド・ジャンの依頼で作曲されました。第 2 番は、オーボエ協奏曲ハ長調を一音上に移調して書き直したもので、モーツァルト作曲オリジナルのフルート協奏曲は、これ一曲だけであります。第一楽章:アレグロ・マエストーソ ト長調、第二楽章:アダージョ・ノン・トロッポ ニ長調、第三楽章:「ロンド」テンポ・ディ・メヌエットの 3 楽章よりなり、20 数分のそこそこの曲です。



Friedrich Wilhelm II

K314 もフルート協奏曲 第 2 番 ニ長調 (285d) で、前述のようにオーボエ協奏曲ハ長調をニ長調に移調しただけの作品です。

K315 は、フルートと管弦楽のための アンダンテ ハ長調 (285e) です。この曲は、1778 年に上記フルート協奏曲 第 1 番 の第 2 楽章 として、書き直したものです。

K316 は、レシタティーフとアリア「テッサリアの民よ」「私は求めない永遠の神々よ」です。パリ旅行の間に作曲し、帰路の 1779 年 1 月 8 日ミュンヘンで、完成された、Ob と Fg のソロに、Hr 2 本と弦楽器をバックにソプラノが独唱する 10 分余りの作品です。特にアリアの部分は力強い歌唱の作品となっています。

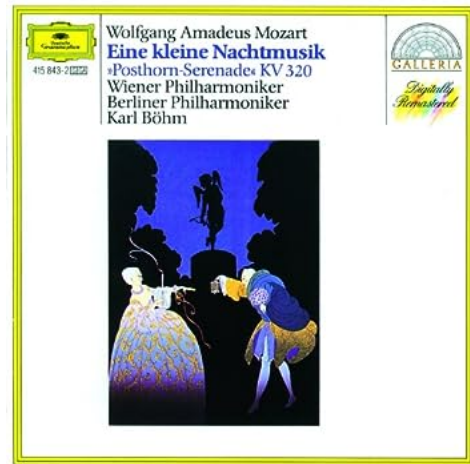


K317 は、「戴冠ミサ」ハ長調 です。1779 年 3 月 23 日にザルツブルクで、2 回目のパリ旅行から帰って 2 か月後の作品です。未完の「レクイエム ニ短調 K626」に次いで、名の知れた宗教曲ではないでしょうか？ キリエ、グロリア、クレド、サンクトゥス、ベネディクトゥス、アニヌス・デイの 6 曲からなり、ザルツブルク郊外のマリア・プライン教会（奇跡が行われたとされる教会）で、祭壇の前に幼時のキリストと聖母像が飾られ、1751 年に 5 色鮮やかな王冠を載せたが、その後毎年その日に記念するミサが行われ、モーツァルトは、1779 年の孫祝日のために作曲したものといわれています。荘厳というよりは、明るく開放的なミサ曲といってもよいのではないかと思うほど陽性な 30 分弱の作品です。

K318 交響曲 第 32 番 ト長調、K319 交響曲 第 33 番 変ロ長調 は、「巡礼-その 5」で交響曲をまとめて巡

っているので飛ばします。

K320 は、セレナーデ 第9番 ニ長調「ポストホルン」！です。1779年8月3日にザルツブルクで作曲されました。ザルツブルク時代の最後のセレナーデです。Fl・Ob・Fg・Hr（ポストホルン）・Tp各2本、弦5部、ティンパニという比較的大規模な楽器編成のうち、全7楽章に及ぶ40分以上の大曲です。アダージョ・マエストロの序奏に始めるアレグロ・コン・スピリトの活気に満ちた主部の第1楽章で始まり、メヌエット、アンダンテ・グラツィオーソ、ロンド・アレグロ・マ・ノン・トロツポ、アンダンティーノ、プレストと全7楽章がいずれも魅力的な旋律に溢れており、まさに傑作で、何度聴いても飽きない作品です。なお、ポストホルンというのは、当時の郵便馬車が到着を知らせる合図に鳴らしたラッパのことで、それが現在でも地域によってはバスにとって代わっているようです。（このうちの第1楽章と第5楽章、第7楽章を抜粋して、交響曲ニ長調として、演奏されることもあるようです。） ※写真は私の愛聴盤バーム指揮BPO



K321 は、<sup>ヴェスベレ</sup>主日晩課（日曜日のための晩課）ハ長調で、1779年ザルツブルクで、作曲されたと、草稿に他人の筆跡で記入されています。Tp・Tb各2本、弦5部、独唱4（特にソプラノが活躍）、混声合唱よりなり、ディクシット、コンフィテール、ペアトゥス・ヴィル、ラウダテ・プエリ、ラウダテ・ドミニム、マニフィカートとう6章よりなる朗々と歌声が響く30分程の作品です。

K322 は、キリエ 変ホ長調 は、壮大な編成のミサ曲を目指したのですが、このキリエだけで、未完成に終わっており、今回のCD全集にも収録されておられません。以下、K323のキリエ ハ長調 も未収録、K324、K325、K326、K327のヒムヌスも、未収録で、作品全集にも取り上げられておらず、聴くことができませんでした。

K328 は、教会ソナタ ハ長調で、オルガン、Ob・Tp・Hr各2本、Vn2部、Vc、Cb、Tpの編成で、1779年の3月にザルツブルクで作曲されました。

K329 も、教会ソナタ ハ長調で、オルガン、Vn2部、Vc、Cbの編成で、1779年3月、前述のK317「戴冠ミサ」と同時期に作曲された、輝かしい気分満ちた作品です。演奏時間は、前曲と共に数分です。

K330～K333の4曲のピアノソナタは、前号にて掲載済みです。

K334 は、ディヴェルティメント 第17番 ニ長調で、1779年の夏、ザルツブルクで、ロベニツヒ家の祝宴のために書かれました。弦4部（Vn2部、Va、Vc、Cb）にオブリガードとしてのHr2本と小編成ですが、アレグロ、アンダンテ（変奏曲）、メヌエット、アダージョ、メヌエット、アレグロからなる全6楽章からなり、演奏時間40分近い大曲です。

K335 は、2つの行進曲です。2曲ともニ長調で、いずれかの曲は、ポストホルン・セレナーデニ長調 K320の開始曲と最終曲として演奏するための曲として作られたものと考えられています。

K336 は、教会ソナタ ハ長調で、1780年3月にザルツブルクで作曲された、モーツァルトの最後の教会ソナタです。編成は、VN、Vc・Cbとオルガンだけと小さく、オルガン協奏曲の趣の5分程の小品です。

K337 は、ミサ（ソレニムス）ハ長調です。1780年3月19日のミサのためにザルツブルクで作曲されました。

Ob、Fg、Tp、Tb各2本、Vn2部、Vc・Bs、Tm、独唱4、合唱という大規模な編成で、キリエ、グロリア、クレド、サンクトゥス、ベネディクトゥス、アニュス・デイの6部よりなる30分足らずの作品です。

K338は、交響曲 第34番 ハ長調 で、すでに記述しました。

K339は、荘厳晩課 ハ長調 で、1780年ザルツブルクで作曲された、ザルツブルクでの最後の教会作品となります。Fg1本、Tp2本、Tb3本、Tm、Vn2部、VcCbOgの管弦楽と4人の独唱と混声合唱という編成です。曲は、ディクシット、コンフィテボール、ベアトゥス・ヴィル、ラウダテ・ペエリ、ラウダテ・ドミヌム、マニフィカートの6部からなる30分程の曲です。特に5曲目のラウダテ・ドミヌムはソプラノ独唱と合唱による、一度聴いたら忘れられないほどの美しい曲で、単独でも取り上げられることも多く、これだけでも心のあられる名曲です。

K340は、キリエ ハ長調 ですが、疑問の作といわれ、本CD全集にも入っていません。

K341は、キリエ ニ短調です。1780年から1781年にかけてミュンヘンで作曲された7分程の曲で、『ミュンヘンのキリエ』と呼ばれています。編成は、Fl、Ob、Cl、Fg、Tp各2本、Hr4本、Tm、Vn2部、Va・Vc・Cb・Og、4部合唱という、派手な楽器編成で、かの地での就職を目指した力が入った曲です。

K342は、奉納唱 ニ長調ですが、父レオポルドの作といわれ、このCD全集にも入っていません。

K343は、2つのドイツ語教会歌曲で、1779年ザルツブルクで作曲されました。いずれもフォルテピアノの低音に乗ってバス・バリトンで歌われる短い作品です。

K344は、未完成のジグシュピール「ツァイーデ」です。これは1779年から80年初めの作とみられています。残念ながら未完成のまま残った遺稿がモーツァルトの死後に楽譜束の中から出てきました。草稿は第二幕までしかなく、しかも序曲もないし、オペラの題もついていません主人公がツァイーデなので「ツァイーデ」という題が後でつけられました内容的には三年後に作られた「後宮からの逃走」の先行作でその習作とも思えますトルコを舞台とするその物語も同じだし登場人物も名前が異なるだけで内容はほとんど同じです。8曲からなる第一幕と7曲からなる第二幕まで書かれていますが最後は未完のままとなっています演奏時間は1時間20分程です。

K345は、英雄劇「エジプト王ターモス」への合唱と幕間音楽です。モーツァルトの劇の付随音楽としては唯一のもので、1773年にウィーンで作曲し、その後1779年にザルツブルクで、改訂されて、現在は、3曲の合唱曲と4曲の幕間音楽（管弦楽）より構成されています。

K346は、三重奏ノットゥルノ「いとしの瞳、麗しの目」です。ケツヘルの初版では1780年の作とみなされていましたが、K346がつけられましたが、実際にはK436～439の4曲のノットゥルノと同時期である1783年の作になる小品です。

K347は、6声のカノン「滴るワインが、グラスに光るところ」です。1782年作とみなされ、2声のソプラノと4声のテノールで歌われる小品です。

K348は、3つの4重唱のためのカノン「お前が心から好きだ」です。前曲と同様、2分足らずの小品です。

K349は、歌曲「満足」です。続くK350は、有名な「子守唄」ですが、

現在ではモーツァルトの作品ではなく、フリードリッヒ・フライシュマンの



Friedrich Fleischmann

作品であることが半明し、新全集には含まれておらず、このCD全集にも収録されていません。



K351 も、歌曲「来い、好きなチター」ですが、このCD全集には収録されていません。

K352 は、8つの変奏曲 ハ長調（グレートリー（1741～1813）の「ザムニーテの結婚」の行進曲の主題による）です。1781年6月にウィーンで作曲された変奏曲です。主題と8つの変奏曲より構成される10数分の曲です。

K353 も、12の変奏曲 変ホ長調（「美しいフランソワーズ」の主題による）で、1778年パリで作曲されました。主題は当時パリではやっていたシャンソンから採られたものです。

K354 も、12の変奏曲 変ホ長調（ポーマルシェの「理髪師」のロマンツェ主題による）で、同じく1778年パリで作曲されました。こうして、既述と合わせて、K354、K265、K353、K264の4つの変奏曲がパリで作曲されました。



K355 は、メヌエット ニ長調 です。この曲は長年作曲年代が不明でしたが、現在では、K576のニ長調ソナタの第3楽章として作曲されたものとされており、第6版ではK576bに移行されています。

K356 は、グラスハーモニカのためのアダージョ ハ長調 です。1784年以前の作とされていましたが、今では盲目の女性演奏家キールヒゲスナーのアンコール用に作られたとされる小品で、1791年作とされて、ケツヘル番号もK617aに移行されています。

K357 は、4手のためのアンダンテ ト長調 ですが、未完の作品という事もあって、このCD全集には収録されていません。

K358 も、4手のためのソナタ 変ロ長調 です。1774年か翌年にザルツブルクで作曲されたものですが、ケツヘル初版の頃は、1780年作とされていたためこのケツヘル番号が付きましたが、現在の版では、186cとなっています。アレグロ、アダージョ、モルト・プレストの3楽章よりなる15分程の曲です。

K359 は、12の変奏曲 ト長調 「羊飼い女セリメーヌ」です。表題のシャンソンのメロディーを主題にした12の変奏曲で、ヴァイオリンとピアノで演奏されます。1781年6月にウィーンで弟子のために作曲されたものと思われています。

K360 は、6つの変奏曲 ト短調「あ、恋人は去った」で、前曲と同時期に同目的で作曲されました。

K361 は、セレナーデ第10番 変ロ長調「グラン・パルティータ」です。編成がOb、Cl、BHr、Fg各2本、Hr4本、Cb1台 合計13本の楽器編成によるため「13管楽器のセレナーデ」とも呼ばれています。（実際には12の管楽器とコントラバスですが）1780年ミュンヘンで作曲されたといわれています。ユニークな楽器編成もさることながら、今までにない新しさに満ち溢れた大作であり、傑作です。モルト・アレグロ、メヌエット、アダージョ、メヌエット、ロマンツェ、主題と変奏アンダンテ、ロンド：アレグロ・モルトの7楽章の演奏時間50分近くに及ぶ大作です。また、映画「アマデウス」でも、第3楽章や第7楽章が利用されて、この曲の知名度を一段と高めたことでも知られているので、きっと耳にした方も多いことと思います。

K362 は、K366「イドメネオ」の第14曲行進曲ハ長調と同一です。理由は不明です。

K363 は、3つのメヌエットですが、3曲合わせて4分位の小品です。

以下 モーツァルト巡礼ーその 13 へと続きます。